

## 私の故郷 秋田市四ツ小屋

榎 利風

自分の故郷は秋田平野のど真ん中にあります。秋田の風土記を繙くと地名の由来は開墾を目的に移住した四戸により開村したと記されており、その四人は伊藤勘左衛門・伊藤助右衛門・榎佐五右衛門・榎籐右衛門であり、自分の生家は榎佐五右衛門を本家としており、今も隣りあって屋敷を構えています。

それなりの農家でしたが、父が病弱だったため勤め人となり、母が農業ひと筋に踏張っていました。9歳年上の兄が高校を出るまでは働き手がないため、住み込みの「めらし子」がおりました。めらし子とは秋田も含む北奥羽地方の方言で、美人で良く働く未婚の女性をいいますが、小学生低学年だった自分にはお手伝いの人と言う感じでした。給金がどのようになっていたか定かではないですが、我家から嫁に出たらしく、よく挨拶に来ていたのをうろ覚えに記憶しています。

18歳で大学進学のため出郷し約60年にならんとしています。帰省の度に目にする風景は、北に太平山の山並、北東に田園遙かに

出羽富士と呼ばれる鳥海山、滔々と流れる雄物川の流域に広がる秋田平野の中の小さな集落、これが自分の故郷の原風景です。

小・中学校の同級生が親となり、実家を継いで頑張っているうちは、小さな集落故、まだまだ行き交う人に面識があり、故郷は身近でした。同級生の子供達が成人し働き手となってきた頃より、道で会う若い人に面識がなくなり、世代交代が進んでいるのだなと納得していました。それでも、人は変わっても家々の大時代的<sup>おおじだい</sup>な屋号だけは覚えていました。

今年4月、姉の三回忌で帰省した時、本家は佐五右衛門さん、我家は惣太、道路向いは円兵衛さん、斜め向かいは久左衛門さんなどと屋号はいえたのですが、生家から四、五軒離れるとうろ覚えで大半は思い出せませんでした。

道すがら、自分より高齢と思われる散歩の人に「この家は元市議会副議長をされた榎清さんの家ですよ。政界を引かれたと記憶していますが、今どうしておられますかね。」と尋ねたら、「俺だよ」との答え、失礼を陳謝しつつ心から故郷は遠くになったと実感しました。

室生犀星の詩「ふるさとは遠き

にありて思ふもの」の一節は身に  
沁みます。それに続く「そして悲  
しくうたふもの」のフレーズに実  
感を覚えるこの頃です。

## 満目の青田の端の生家かな 利風

追記 7月14日からの秋田県の大雨による被害は、テレビ等でご承知の事と思います。故郷は遠くなりけりですが、このような事があると俄かに身近になり、あちこちに電話で連絡を取りました。高校通学で通った秋田駅東側が冠水し、どうなることかと心配しました。多分、想定外の雨量のもたらしたものと結論付けられるでしょう。実家は大丈夫でした。

24日から、墓参を兼ねて秋田に帰る計画でしたが、何と宿泊予定の市内の温泉ホテルが冠水し対応できないとの事、急きょキャンセルしました。人生、一瞬先は闇。只々今日という日を懸命に生きる事ですね。